２０１５年度ＮＩＥ
実践指定校報告書

Newspaper in Education

明和町斎宮小学校
伊賀市柘植小学校
みえ夢学園高校
松阪市松尾小学校
鈴鹿市一ノ宮小学校
南伊勢町南島中学校
朝明高校
セントヨゼフ女子学園高校・中学校

NIE実践報告

２０１５年１２月２５日

斎宮小学校　教諭　小山直俊

はじめに

本校は全校児童４０６人、各学年約６０人～７５人で２～３クラス規模の学校である。

ＮＩＥ実践校に指定される前から地元新聞販売店さんのご厚意で、４年生以上の各クラスに１部ずつ朝刊をいただいてる。

そのため、以前から新聞を扱った活動は細々ながら実施していたが、教職員の個々の取り組みであったため、実践校指定をきっかけに、学校組織としてＮＩＥ活動を実践していくことになった。

実践のねらい

本校は、ここ数年、毎年新規採用教員が赴任しており、本年度は教職員経験年数が６年以下の職員が約２８％在籍している。そのため学年部で授業方法の共通理解を図ったり、学級経営について研修会を開いたりしてスキルアップを目指している。

ＮＩＥ活動でも組織的に取り組むことで、経験の少ない教員の不安感を減らしていけると考えている。

さて、今年度が実践指定としての１年目であるため、まずは教員が新聞活用の授業を体験し、新聞活用の効果を実感することに重点を置いている。

主な実践

ＮＩＥ活動を実践するにあたり、４月の研修会でＮＩＥ活動の具体例を紹介した。

低学年では、知っている漢字探し、写真で記事を想像する、担任による新聞クイズ、写真カルタ、中学年では、新聞作り、気になる記事紹介、投稿、担任が紹介した記事の感想を川柳でまとめるなど、高学年でが、社会科や道徳などの投げ入れ題材として、新聞を読み比べ主張の違いに気付かせるなどである。とにかく、ＮＩＥ実践の経験があってもなくても、１年目はいろいろやってみることにした。

５年生では、両クラスで、朝の読書の時間にその日担当になった児童２人に新聞を読ませ、帰りの会で気になる記事を紹介させている。

取り組み当初から比べると、最近はスピーチ後の感想や質問が多く出されるようになり、質問に対しても的確に答えられるようになってきた。コミュニケーションが活発になっている。

さらに社会に対して興味を持つ子どもが多くなってきた。

６年生のあるクラスは、作文が苦手という児童が多いことから、投稿欄を活用しどんな文章が読みやすいのかを分析し、投稿文の傾向をつかませ、自分の作文構成に活用させた。書き上げた作文の投稿にもチャレンジさせている。幸いにも４月早々に掲載され、子どもの作文への意欲がかなり増した。

初見の文章でも気後れせずに読みこなせるよう、朝の読書時間に記事の読み取りを行った。一般紙の朝刊や子ども新聞など、担任が選んだ記事から問題を３つ設定し１０分以内に読み取るよう指導してきた。記事の大きさはＡ４サイズを目途にしており、最初の頃は苦手意識を持っていても回数を重ねると、求めている記述がどの辺に書かれているかが分かるようになっていったようで、課題をこなす時間が短くなっていった。

さらに、６年生では調べ学習でも新聞を活用した。６年生の総合的な学習の時間のテーマの１つに世界平和がある。これまでは地雷の撤去や、核兵器の問題を扱うことが多かったが、今年はシリア難民について子どもたちが関心を示した。１ヶ月分ほどの記事を調べることで、シリア難民発生の理由や難民支援の現状など、子どもたちの疑問が一気に解決した。

また、安全保障関連法案について、新聞から得た情報をもとに、集団的自衛権に賛成か、反対かで討論させた。この時は、中日新聞と読売新聞の２紙を読み比べ、賛成反対の意見を紹介した。

この時は集団的自衛権賛成の意見が多かったが、子どもたちの生活圏にはないことにもじっくり考えさせることができ、視野が広がった。

４年生では、国語科題材「アップとルーズで伝える」の学習時に、実際の新聞写真を見て「アップ」と「ルーズ」に分けさせ、題材の内容をより具体的に理解させた。

さらに、ＮＩＥ事務局の協力で、実際に記者から写真の撮り方や記事の書き方について指導してもらった。特に文章の書き方について「文章は誰かに伝えるために書くもの。文章を書く時には誰に書くのかを意識して自分の思いを伝えて欲しい。」と教えられたことが子どもたちにとって印象的だったようだ。以下に、子どもたちの感想を紹介する。

＜Ａさん＞

　新聞社の方がいろいろなことを教えてくださってとてもうれしかったです。心に残ったことは、誰に向かって書いているかを考えて文を書くと言うことです。日記を書いたり、手紙を書いたりする時に使いたいと思いました。

＜Ｂさん＞

　新聞を書く時、相手の気持ちを考えて書くということが分かりました。わたしもだれかに手紙などを書く時は、相手の気持ちを考えて書こうと思いました。伝えることがむずかしいということも分かりました。

　３年生では、朝の会で子どもたちに理解しやすい記事を選び、紹介した。「今日のニュースは・・・・」と朝の話に取り入れるようになってから、子どもたちは、友だちの知らないニュースを話したくなったらしく、興味をもってきた。

　最初の頃は、発表が見出しだけだったのが、内容を家の人に聞き、詳しく発表する子どももでてきた。家族も新聞に関心をもってくれることも嬉しい。

　子どもたちの知識欲をくすぐっている。

　低学年では、担任による記事紹介やひらがな探しを行った。

　ひらがな探しでは、教科書の字より小さい字にも関わらず、根気強く探し、意欲的だった。
普段、国語の学習に意欲的ではない子どもが積極的に取り組むことができた。

　これまで新聞をじっくり読んだことがない子どもにとって、今回の取り組みは新聞に触れるいい機会になった。

　担任による記事紹介により、外国の出来事に興味を持ったり、時事問題にも関心を持ったりすることができた。

　その他、教材としての活用ではないが、破いた新聞を時間内に元に戻す新聞パズルや、新聞紙上に立った状態のジャンケンで負ければ新聞を半分ずつ折っていき最後まで立ち続けることができるかを競う新聞ジャンケンなどレクリエーションの素材としても扱った。

成果と課題　全体的な傾向

　全学年でＮＩＥ活動に取り組んだ結果、次のような成果や課題が見えてきた。

＜成果＞

〇担任が記事を紹介すると、興味を持つ児童が多く、子どもの視野を広げるきっかけになる。紹介したことを家で自慢気に話をすることもあり、保護者は「私達もいい勉強になります」「いつの間にかこんなことまで理解できるように成長していたんですね」と好評である。

〇投稿欄を活用することで、どのような作文が分かりやすいのかを見つめ直すことができ、自身の作文に生かすことができる。

〇読めない字があっても、前後の文脈から意味を想像して読んでいくことは、新聞以外の文章読み取りでも大いに役立つ。文章の多い全国学力・学習状況調査や民間の学力調査などの課題にも通じてくる。

〇新聞記事は、教科書やドリルに比べ子どもたちにとって学習素材として抵抗感が少なく、取り組みやすい。

〇新聞には掘り出し物の記事があり、偶然見つけた記事が教材に使えたり、子どもが学習欲を高めたりするいいきっかけになるとともに、視野を広げることができ、考え方や価値観の変容につなげやすい。

〇調べ学習では、インターネット検索のように情報量が膨大ではないため、必要な情報を調べやすい。

＜課題＞

△やればやるほど効果はあるが、授業時数が限られており、既存のカリキュラムにＮＩＥ活動を沢山入れることができない。読み取り学習ではプリントした記事を添付して宿題に出したいが、著作物２次利用の規定違反になるため、授業でしか取り組めないことが残念。

△２次利用で許諾を取った際、ある新聞社から掲載料が必要である旨、言われた。ＮＩＥ活動や保護者への啓発活動などで２次利用する場合は、例外として扱って欲しい。

△教職員自身が新聞を読まないと、記事の面白さや価値に気づけないが、新聞をじっくり読める時間をなかなか確保できないため、職場労働環境の改善が必要である。

△今年度は低学年への新聞割り当てが１ヶ月ずつだったため、様々な取り組みはできなかった。全クラスに新聞が行き渡ると、初めて扱う教職員にとってもっと身近な教材になっただろう。

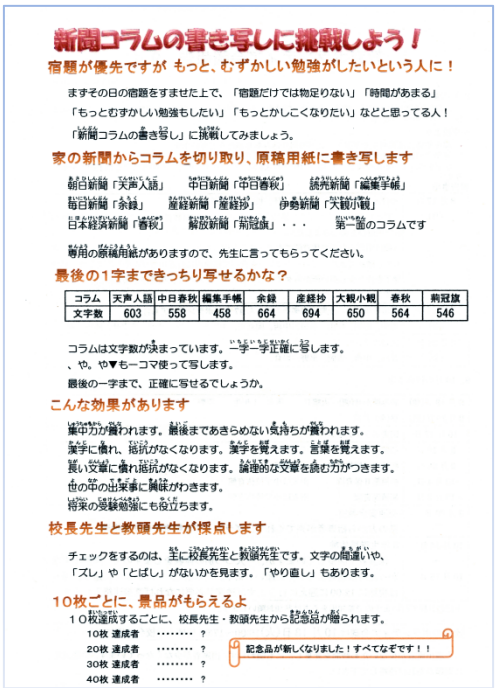
新聞を通して学びに向かう土台をつくる
～新聞のスローライフ的アナログ活用の提案～

伊賀市立柘植小学校
教諭　中森　敏文

１．はじめに（新聞活用の動機とねらい）

全国学力学習状況調査の結果を分析したところ、Ｂ領域いわゆる活用力に課題があることがわかった。特に国語科の観点別では言語事項の活用や意欲関心が落ち込んでいた。実際、子どもたちの様子を見ると、、100 点になるまで繰り返し行うテスト、山のような宿題、鬼のような夏休みのプリントなどで鍛えられているし、子どもも当然のように「お残り」し、「お直し」のために担任名のついた補充学習「〇〇スクール」に通い、その結果として基礎基本は数値的にも高かった。しかし、所詮「させられている」感は否めず、本当に勉強したいという自ら学ぶ主体性に欠けているように感じられた。また、スタンダードとして決められている学年×15 分の家庭学習についても、学力の高い子にとっては、宿題では物足りず、時間が余り、かといって自学自習をする児童はごくわずかであった。

そこで、４年前に「学力拡張計画」と名付けたプロジェクトを立ち上げた。ひとつは、学力を下支えする「知育あそび」コーナーを階段の踊り場に設けたり、廊下にかかっているカレンダーやポスターを四字熟語のカレンダーや英語の単語ポスターや県名地図にかけかえたりする学びの環境づくりである。ふたつめに、漢字検定の準会場に手を挙げ、「漢検」受験を子どもたちにすすめた。みっつめが、「新聞コラムの書き写し」である。できる子で、自学自習のテーマを見つけられない子は、自宅で購読している新聞のコラムを一字一句写し取り、学校に持ってきて採点してもらうという取り組みである。（実践内容１）


新聞コラムの書き写しに挑戦しよう！

宿題が優先ですが もっと、むずかしい勉強がしたいという人に！

ますその日の宿題をすませた上で、「宿題だけでは物足りない」「時間があまる」
「もっとむずかしい勉強もしたい」「もっとかしこくなりたい」などと思ってる人！
「新聞コラムの書き写し」に挑戦してみましょう。

家の新聞からコラムを切り取り、原稿用紙に書き写します

朝日新聞「天声人語」　中日新聞「中日春秋」　読売新聞「編集手帳」
毎日新聞「余録」　産経新聞「産経抄」　伊勢新聞「天観小観」
日本経済新聞「春秋」　解放新聞「荊冠旗」・・・　第一面のコラムです

専用の原稿用紙がありますので、先生に言ってもらってください。

最後の１字まできっちり写せるかな？

コラム	天声人語	中日春秋	編集手帳	余録	産経抄	大観小観	春秋	荊冠旗
文字数	603	558	458	664	694	650	564	546

コラムは文字数が決まっています。一字一字正確に写します。
、や。や▼も一コマ使って写します。
最後の一字まで、正確に写せるでしょうか。

こんな効果があります

精神力が養われます。最後まであきらめない気持ちが養われます。
漢字に慣れ、抵抗がなくなります。漢字を覚えます。言葉を覚えます。
長い文章に慣れ抵抗がなくなります。論理的な文章を読む力がつきます。
世の中の出来事に興味がわきます。
将来の受験勉強にも役立ちます。

校長先生と教頭先生が採点します

チェックをするのは、主に校長先生と教頭先生です。文字の間違いや、
「ズレ」や「とばし」がないかを見ます。「やり直し」もあります。

10枚ごとに、景品がもらえるよ

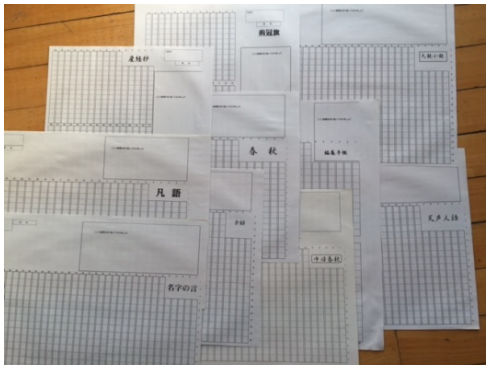
１０枚達成するごとに、校長先生・教頭先生から記念品が贈られます。
10枚 達成者 …… ？
20枚 達成者 …… ？
30枚 達成者 …… ？
40枚 達成者 …… ？
記念品が新しくなりました！すべてなぞです！！

年々向上しつつある学力だが、さらに子どもたちに、主体的に学びに向かう姿勢を養いたいと願い、新聞活用の実践校に手を挙げ、新聞を活用した授業づくりに取り組み始めた。本校の教育目標「社会をたくましく生き抜く足場づくりの教育」の一翼を担うものと考えた。

２．実践内容

（１）新聞コラムの書き写し

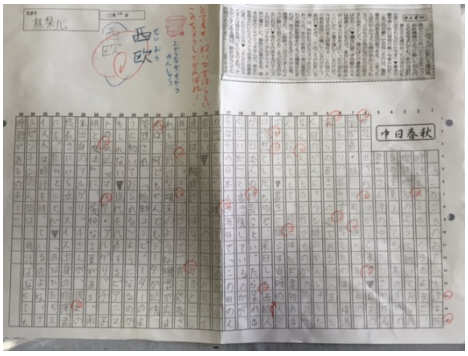
まず学校側で、「天声人語書き写しノート」を参考に、保護者が購読しているであろうと思われる新聞の第一面のコラムを入手し、エクセルで視写用のワークシートを作成した。字数・行数が一定で、タイトルや日付の位置が固定されているコラムである。「中日春秋」「編集手帳」「余録」「産経抄」等である。小学３年生が書く文字の大きさを考え、Ａ３サイズに統一し、何枚かプリントし、Ａ３のクリアファイルを用意して３年生以上の教室に常置し、ほしい子どもがそこから自由に持ち出すという形にした。



「できる子」の学力拡張をねらう目的なので、日頃「できない子」を大事にして取り組むのが先生たちという考え方から、先生たちが低学力対策に集中してもらうためにも、添削採点は管理職が行った。文字数と漢字のミスを点検し、「直し」をして再提出して来た作品を個人ファイルに綴じ、職員室前の戸棚に展示し、全校児童が自由に取り出して閲覧できるようにした。

物珍しさもあり、初年度は年間 40 名（３人に一人）もの児童が取り組んだ。うち、年間通して続けた児童は 15 名程で、最多が６年生の 40 枚であった。10 枚ごとに流行キャラの文房具を景品としてプレゼントした。また、上位枚数者には年度末に全校生の前で表彰した。年ごとに最高枚数が増え、本年度はトップはすでに 80 枚を超えている。

保護者児童向けの案内に書いたように、「長い文章に慣れる」「世の中のことに関心がもてる」「受験勉強に役に立つ」ところまでいくのだろうかと半信半疑でスタートしたが、取り組んでみて思うことは、「確実に集中力が養われる」「取り組むほどに読み取る力まで養われてくる」ということである。取り組み始めたばかりの子どもはやはり写し間違いや、漢字のミスが多いが、10 枚も書きすすめるころには、ほとんど間違いがなくなってくる。それどころか、「この子は内容がわかるから、ミスも減っている」と思わせたり、「こんな難しい漢字は、別の辞書かなんかで探してるんやろなあ」と思わせたりする書きぶりが感じられるのである。子どもたちは毎日日記を書き、それを「一枚文集」という形で通信にして発行するという取り組みもしているが、その中に「新聞コラムの視写をしていて、わからない言葉があったので、父に聞きました。父もわからないというので、父といっしょにネットで探しました」というつづり方が出てくるようになった。さすがに、３・４年生の児童は写すのが精一杯、難しい漢字は形をつかむぐらいという子が多く、明らかに景品目当てだなという感じでスタートするが、その子たちも 10 枚を超える頃にはほぼ正確に写せるようになるのである。



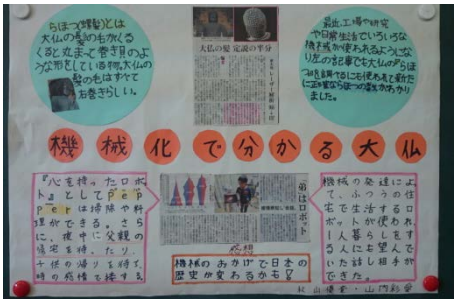
（２）新聞を活用した授業

６年生の社会科「歴史」で『新しい日本へのあゆみ』の学習に入る前に、現代に社会に関心をもたせようと新聞を活用した授業を行った。まずは、何日間か期間を設けて、社会問題などから自分たちが興味をもった記事を見つけてくることから始めた。毎日新聞に目を通すことで社会で問題になっていることや記事について関心をもつことにもつながっていった。その上で新聞記事を切り抜いて考察し、自分の考えにつなげていくことにもなった。いくつかの切り抜きの中からペアで伝えたいことを選び出し、一つの作品として、仕上げていくことにした。その時に、参考にしたものが『新聞切り抜き作品コンクール』の作品集であった。

まとめていく段階で、子どもたちは、新聞記事をじっくりと読み、タイトルになるものを見つけたり、考え出したりしていった。また、記事の中の分からない語句は辞書や辞典などで調べ、豆知識として書くこともあった。いくつかの記事をどのように貼れば、他の子によく伝わるのかを考え、記事をいくつかに分けて貼るグループもあった。さらに、記事の中から大事なことを大きく書いてわかりやすく伝えようとしていた。完成したものが写真のようなものである。

発表のための練習では、各グループ３分以内と制限を設け、伝えたいことをしぼりながら、簡潔に伝える練習をしていた。

発表は、黒板に作製した作品を貼り、二人で指をさす人、話す人など手分けしながら伝えていた。発表の中には、必ず自分たちの意見を話すように話してあったので、自分の考えを入れながらまとめることができていた。そして、感想を言い合った。



今回の、この取り組みを行い、子どもたちから「普段じっくりと新聞記事を読む機会があまりないので、とても良い機会になりました。」「新聞記事をまとめてくれてあったので、名前だけ聞いたことのある問題がよく分かりました。」など感想が出ていた。

３．まとめ（成果と課題）

（１）成果

新聞コラム視写に取り組む児童は年平均 20 数名で５・６人に一人が取り組んでいる勘定になる。児童会の集会活動で、「友達発見コーナー」というのがあるが、「年間 100 枚を目指してがんばっています」と自己アピールする児童が出てきて、それを聞いていた児童が新たに取り組み始めるなど、徐々に定着し始めたように感じる。

保護者の評価も極めて良好である。エピソードとしてあげると、新聞コラムの視写プリントに保護者自身が取り組み提出してきた。子どもと同じように採点し、返すと、「ここまで見てくれるとは思わなかった」と感謝された。市の教育委員巡視で紹介すると、教育委員長が「絶対に将来役に立つ。孫をこの学校に通わせたい。」とつぶやかれた。何よりも、「学校が子ども一人ひとりを大事にして学力を上げようと工夫している」と実感され、信頼を寄せてくれるようになった。（学校評価項目での数値＝８８％が肯定的）

ＮＩＥで届けられる数種類の新聞をめくって、同じスポーツ関係の記事の読み比べをしている低学年の児童たちの姿が見られた。ただ写真や大見出しを見ているだけのようであるが、「新聞になじむ」「親しむ」姿であるのだと感じた。

新聞記事にじっくりと目を通すことで、今まで難しく感じていた社会問題を身近に感じることができたように感じる。新聞記事を切り抜いて作品に仕上げることは、特に難しい作業ではなく、短い時間ですることができたので、子どもたちにとって、とても取り組みやすく、「またやってみたい」という声が上がるほどであった。また、学力テストなどで要旨をまとめるなどの活用力の向上にも役立つのではないかと感じた。

（２）課題

小学生にとって新聞コラムの内容は難しい。本当の意味で理解できる児童はほんの一握りであると思われる。従って内容の読み取りやコラムを活用して議論するような授業としての取り組みはやはり中高生レベルであると思われる。「小学生新聞」のように、発達段階に応じたコラムの採集利用が必要である。

活用力を育てることも、新聞記事の切り抜きをまとめる取り組みも、継続して行うことが必要であると考える。今年の授業での取り組みでは、継続した取り組みができなかった。子どもたちが自ら興味を持ち、まとめたいと思えるように取り組みを進めていきたいと思う。

また、学校ではケイタイスマホが禁じられているが、子どもたちの多くがゲーム機やタブレットを、家で当たり前のように使っている。新聞・辞書・百科事典の代わりにネットを自由自在に使いこなし、思いついたことを添削なしに世界に向けて発信している児童までいる。若い教師も半数以上新聞を購読せず、情報収集はネットで済ましている。この流れは今後もっと加速すると思われる。さらに、タブレット端末を使い、ネットで交信したりする授業もどんどん開発されている。

しかし、文字を目で追い、内容を理解し、考えを文章に表し、手書きし、推敲・配列して仕上げるという営みは、必要不可欠な基礎学力でもある。時間がかかり、面倒くさい作業である。そのような不易な部分で、新聞は教育に活用されていく可能性があるのではないかと考える。

みえ夢学園報告書

現代社会（１）

・福祉コースの生徒の補修単位として、９月以降週２単位で行っている。
・対象生徒は、男子２名、女子２名、計４名で行っている。
・将来、介護福祉士の資格を習得することを目標にしているので、今回のＮＩＥの取り組みでは、福祉に関係のある記事に注目して、新聞を読ませている。

○授業の進行

①新聞を読ませて、記事の中で関心を持った記事を切り取らせる。（各人２つ）
②切り取った記事を生徒と教師分コピーして配布し、ひとつひとつ全員で読み合わせ、事実の把握と課題・問題点等について協議する。
特にこの行程についてはすべての生徒分、時間をかけて丁寧に取り組む。
＜今までに生徒が関心を持った記事＞
・「災害時避難所での要援護者対応」
・「災害時の避難生活・ストレス和らぐ支援」
・「夜間対応デイサービスに注目」
・「認知症の人の気持ち・本人の思いを読み解こう」
・「事後重症による障害年金」
・「デイサービス特色チェック」
・「介護スタッフ、アジアで争奪戦」
・「夜間対応デイサービスに注目」
・「視覚障害男性はねられ死亡・引退直前盲導犬も犠牲」
・「尿漏れ症状　知って対策を」
・「手話で注文・スープカフェ」
・「シリーズ　特別養護老人ホーム」
・「きほんの介護・住民らも担い手に」
③討議対象の記事を提供した生徒は、討議内容を専用の記録用紙に記録していく。
④壁新聞作りに取り組む。４人で相談をしながら、レイアウト等を考え、記録した用紙に書かれていることをもとに仕上げていく。

現代社会（２）

・夜間部、週２単位の授業（受講生２５名）で取り組んでいる。
・90 分授業のうち、隔週４５分を使って取り組んでいる。

・直近３日分の各社新聞を準備する。
・教室後方に場所を設け、自由に新聞を読む時間をとる。
・気になった記事を切り抜き、事前に配布しておいた用紙に貼らせる。
・切り取った記事についてもう一度熟読させ、新聞を貼り用紙にコメントを記入させる。
・授業者の方で全員に還元したい内容の記事を２～３取りあげ、授業者が解説を加える。

図書館において

・閲覧室にこの近辺で発刊されているすべての新聞を置き、生徒に閲覧させる。

ＮＩＥ実践報告　～心を動かすNIE活動～

松阪市立松尾小学校
教諭　辻岡　里佳

１　はじめに

私は今年度，ＮＩＥの活動と初めて出会った。最初はＮＩＥに取り組んでいく中で，どのようなことをして，子どもたちにどのような学びをさせればいいのか分からなかったが，夏のＮＩＥ全国大会の秋田大会に参加してたくさんの実践を知り，今年度の活動に繋げることができた。特に，本校の活動に生かしていきたいと感じたことが「記事に対して心を動かすこと」である。何となく文章を追うのではなく，思いを持って読み進められるようにしていきたいと考えた。

本校はＮＩＥの実践指定校として２年目を迎えた。昨年は，新聞切抜き作品コンクールに向けて，自分の気になる分野に注目して記事を集め，１つの分野に特化した新聞づくりに取り組んだ。本年度は記事に対して心動かし自分の思いを表現させていきたいと考え，書くことを中心に進めていった。

本年度はＮＩＥの活動を通して，小学校学習指導要領で述べられている目標「Ｂ　書くこと」，「Ｃ読むこと」の以下の観点での力を着けさせたいと考えて実践を行った。

●「Ｂ　書くこと」…目的や意図に応じ，考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に着けさせるとともに，適切に書こうとする態度を育てる。（ア，ウ，エ）

●「Ｃ　読むこと」…目的に応じ，内容や要旨をとらえながら読む能力を身に着けさせるとともに，読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。（ウ，オ）

２　実践内容

（１）　国語科「新聞を読もう」（５年）

新聞の読み方を知らない児童が多く，どこに注目して読み進めていくのかを国語科の教科書を用いて学習した。見出しに注目して読み進めていくとよいことや，読者にとって見出しが記事を読み進めるにあたって重要なきっかけになることを掴んだ。

（２）　ＮＩＥコーナー

新聞係を決めて，毎日その日の新聞は棚の上に並べて，古くなった新聞は下の棚に新聞社ごとに分類して収納していく。いつでも新聞に触れることができるように環境整備を行った。朝の読書の時間や隙間時間などで本以外にも新聞を読んでもよいと伝えた。また，家庭で新聞を購読していないお家もあったため，週末のＮＩＥシートの取り組みのための記事選びにも役立っていた。

（３）　ＮＩＥシート

自分で気になる記事を見つけ，５Ｗ１Ｈに気をつけて記事の要約を行う。それに対して自分の感想や考えを書いた。初めは記事のすべてが大切に思えて，短く端的にまとめることに苦戦していた児童たちであったが，回数を重ねるごとに記事が伝えようとしている重要な内容をとらえ，文章にすることができる児童が増えた。また，児童が興味を持った記事についてまとめたり，考えや感想を書いたりしたものに対して，保護者からのコメントをもらった。このことにより，児童は保護者との関わりを持てたこと，記事に対しての意見交流ができたことなどでより充実感を持てたようであった。

書き終えたNIEシートは担任がコメントをして，廊下に掲示していった。友だちがどんな記事を選び，どんな感想を持っているのかに注目して目を通している児童が多かった。友だちと同じ記事を選んでいたり，新聞社は違うが同じ内容の記事を選んでいたり，またその感想を読み比べたりしている姿が見られた。

（４） 社会見学新聞作成

ＮＩＥシートの取り組みを始めてしばらくすると社会見学があり，学んだことを社会見学新聞としてまとめた。新聞のタイトルや記事の見出しを考えたり，割付や段組を工夫したりすることは，新聞の構成について学んではいたが苦戦している児童が多かった。NIE コーナーにある新聞を手本にして構成を考える姿が見られた。「本物の新聞のように」という意識を持って取り組んでいたように感じた。また，いつもは読者として新聞に触れているが，どうすれば読者が読みたいと思うかという新たな視点を意識して活動していた。

（５） 国語科「グラフや表を用いて書こう」（５年）

文章以外の資料を用いて根拠を明確に述べ，資料から分かる自分なりの考えや課題を述べる文章を書いていく単元である。児童は資料を見て自分の注目するポイントを決めて，そこから利点や課題を読み取っていた。文章に書き表していくときも，常体を用いて，自分が述べたいことを的確に，そして考えられる根拠とともに書いていくことができていた。「新聞みたいに書くと上手くいくよ。」と伝えただけであったが，書きぶりをイメージしやすかったのか，どの子もどんどん書き進めることができていた。

３　まとめ

初めて NIE の活動を実践してみて，最新の情報に活字で触れることの大切さに気付くことができた。読書が好きな児童も多くはなく，見出しで興味を引く記事を探して読み進めていくということは，児童の「知りたい」という思いをすぐに満たしてくれた。また，文章量も多くないので，飽きることなく読み進めることができ，読み終えたという達成感を与えてくれたようである。

また，一方では自分なりに文章を書いていくことに対して苦手意識を持っている児童が多い。この課題に対して，新聞記事の的確な文章に触れることや，NIE シートで要約したり，感想を書いたりすることというのは有効だったと感じた。今までは国語で感想を書く活動でも「何行書けばいい？」と言って，内容よりも文章の長さを重要視していた児童が多かったが，自分の感想をスムーズに出せるようになってきたと感じている。そして，文章の長さを意識せずとも内容も伴うしっかりとした文章が書けるようになってきたことには驚いた。

反省点としては，記事選びを児童に任せすぎてしまったことである。コラムや社説などに注目している児童はほとんどおらず，テレビのニュースでも確認できる記事を選んでいる児童が多かった。新聞にしかない，新聞だからこそという記事に目を向けられるような手だてをとることも必要であったと感じた。

１２月までは，NIE シートを用いて，個人で記事を選んでまとめたり考えや感想を書いたりすることを行っており，友だちとの意見交流の機会が設けられなかった。自分の考えや感想を持つだけでなく，友だちの考えや感想に対して，共感したり，比較しながら読んだり，友だちの考えや感想を受けて自分の考えや感想が変わったりしていくような活動を展開していきたいと考えている。そのために，今後は NIE シートの記事を絞って，友だちと同じ記事で取り組んで，読み比べたり，意見の交流をしたりできるようにしていきたいと思う。

ＮＩＥ実践報告 ～４年生の取り組み～

鈴鹿市立一ノ宮小学校
教諭　　近　藤　　泰　典

１　はじめに

新聞を活用した学習は，物事を多面的・多角的に捉えて自分の考えを深めたり，考えたことを自分の言葉でまとめ伝える力をつけたりするのにとても有効であると考えている。

しかし，本校では，新聞を購読している家庭が半分もしくはそれ以下ということと合わせて、クラスに３～４人の外国籍籍児童が在籍しているという現状がある。そのため児童が社会的事象に関わって考える機会は，学習中もしくはテレビやインターネットを通してというのがほとんどで，新聞はあまり身近でない。まして、外国籍児童やその家庭においては、日本語の情報は難解そのものである。

そこで、１学期は、タイムリーではないが、１か月分をまとめたものを、教師自ら家の古新聞を持参し、児童に提供して NIE の活動をやってきた。しかし、９月からは、NIE の指定校を受けているお陰で、毎日４社の新聞が届き、活用したい時はすぐに対応がきくようになった。

普段から新聞にふれあえるような状況を作っておくことは，授業等で臨機応変に活用し、児童の社会に対する関心を高めながら，思考力・判断力・表現力を高めいくには最適であると考えている。

２　実践内容

本格的な取り組みは，２学期から始めた。月４社の新聞が届くので、新聞を置くスペースを設置して、児童が自由に目を通せるようにした。読み終わった新聞は，新聞社ごとに分けて専用新聞棚に置き，全職員も自由に使えるようにした。

新聞の活用　①　１面の記事を集めてみよう。

１０月に入って、９月の新聞から、１面の大きな記事だけを切り抜いて日付順に掲示した。世の中の主要な出来事が羅列されることで、その月のひと月の主要な出来事がつかめた。その月の大きな事件事故、政治のことがよく分かった。

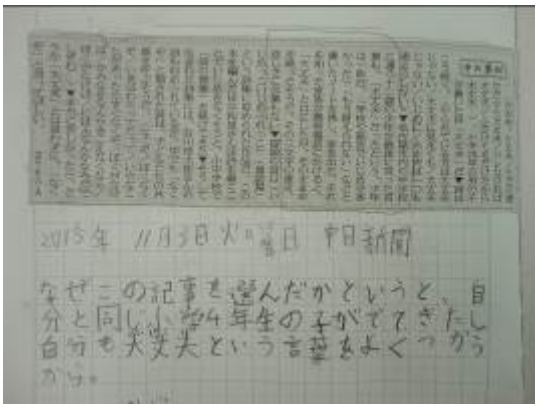
９月は、鬼怒川の氾濫と、安保法案可決が大きなニュースだったが、あれだけ騒いでいた安保法案の記事も、すぐに１面から消えていくという事実も分かった。マスメディアの姿勢と言うと語弊が生まれるかもしれないが、そういう学習もできた。ただ、ニュースとは生もので、読者がいかに調理し咀嚼して身にしていくかにかかっている、そこから考えるきっかけをみつけることが大事だとおさえた。

なかなか各家庭でこのようなことまでしているところはないので、NIE の活動として、新聞社の比較もでき、ひとつの見方を提示できたことで、興味づけにつながった。

新聞の活用　②　記事を要約して感想を書こう。

NIE 専用ノート（A4）を、２学期早々に学年で揃えて購入した。そこへ、選んで切り抜いた新聞記事を張って、文章を、５Ｗ１Ｈ を基本に、読み取っていく作業をやってみた。

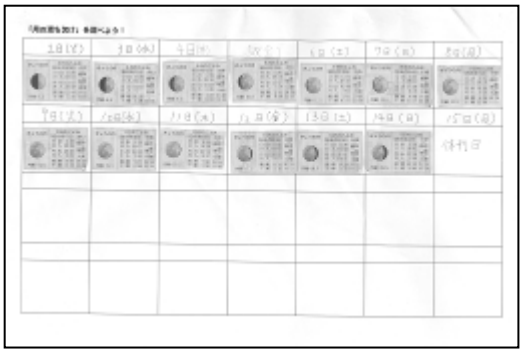
はじめは、教師主導で統一記事を印刷し、同じもので内容の読み取り方を練習し、大体のやり方を学んだ。３回ほどやった後、各自で記事を選び、練習をもとにチャレンジさせていった。



この学習では必ず最後に、感想を書かせ自分なりの考えをもたせるようにした。個人差はあるが、そういう作業を繰り返す中で、思考力・判断力・表現力を高めていけると考えている。

４年生の国語科の学習で、下の教科書（光村ｐ８６）の「たいせつ」にも載っている「文章の要約」というところにつながる有効な手段になると考え、家庭へも学級通信で協力を求め、土日の家庭学習にも取り入れた。

新聞の活用　③　月の満ち欠けを調べよう。



４年生の理科「月と星」の学習の中で，月の満ち欠けについて調べる学習がある。新聞には毎日，当日もしくは次の日の月の形や日の出・日の入りの時刻が載っている。日直の児童に，新聞の中からその部分を探させ，月の満ち欠けの様子を調べさせることにした。１週間ごとに並べて貼らせていくことで，月の満ち欠けの移り変わりやその周期が一目でわかり，その日から１週間後にどのような形になるかも考えやすかった。

児童にはあえて，新聞のどの部分に載っているかを知らせることをしなかった。それは、新聞をめくりながら，さまざまな記事に触れる機会が増やそうと考えたからである。その結果，月の満ち欠けを探しながら、「ああ、このニュース知ってる！」，「見て見て，この写真。面白いよ！」などの会話が聞こえてくることもあり，思惑通りになり、新聞記事の写真に興味を持つことに繋がっていった。

新聞活用　④　アップとルーズを見つけよう。

国語科の学習（光村「アップとルーズで伝えよう」）で、単元の最後に，新聞記事で使われている写真が，アップなのかルーズなのか判断させるとともに，写真から分かることと記事に書かれていることを読み取らせ，その写真にすることでどんなことを伝えたかったのかを考えさせるという活動を行った。

何かを伝えるときには，写真やイラストの入れ方を工夫することで，より効果的に伝えられることを実感させることができた。

新聞活用　⑤　新聞切り抜きコンテストに応募しよう。

中日新聞主催の「新聞切り抜きコンテスト」に応募すべく取り組みを行ってみたが、授業の進捗状況にも左右され、なかなか十分な時間も取れない中で、今年度の４年生の総合学習の「命」というテーマにそって記事集めをし、小グループ（１班４人）で取り組んだ。

新聞はこの３か月余り貯めてあったものを使ったが、児童が集めた記事は 9.11 に次ぐ、パリのテロ事件に集中した。戦後７０年の節目で、戦争を通して「いのち」について考える機会も持ったが、記事の量の多さ、写真の伝える力に圧倒された結果となった。

新聞活用　⑥　他学年の取り組み

３年生で、社会見学のあとのまとめ学習で、「社会見学で見てきたことを新聞にまとめよう」と題して、見学してきたことを新聞風にまとめる作業をする時に、実際の新聞を例に、新聞作りを進めた。

３　まとめ（成果と課題）

◎　今年度も、４年生という成長段階の児童で主に取り組んできてきたが、回を重ねるごとに、新聞に対する抵抗感が薄まり、興味を示す児童が増えてきた。まずは、新聞というものへの抵抗をなくすことができたことは大きい。

◎　教科の学習とリンクさせ、保護者の協力も得ながら、継続的に新聞をめくることで、記事や写真の目の付けどころが変わってきた。

◎　５Ｗ１Ｈに着目して、記事を要約したり、考えを書いたりすることで、思考力、判断力、表現力が少しながらついてきた。今後も継続したい。

◎　あらゆる学習活動の中で、単元ののねらいを達成するために、新聞の活用が有効かどうかを考えながら使用していくことで，児童の活動への意欲を高めたり，より多くの気づきを起こさせたりすることにつながった。

●　子ども新聞も活用するが、一般的な新聞はルビもなく語句や漢字表記が（小学生には）難しい。字面を見ただけで抵抗を示す児童に対する提案の仕方を模索していかなければならない。また、家庭の協力も１００％得られるわけではないので、児童の間に格差が生じてくる。そこをどのように乗り越えるか考えて取り組んでいかなければならない。

●　新聞を活用することのメリットを実感として味あわせなければ、逆に新聞離れ（抵抗感増幅）を起こしかねない。朝読書に時間に、過去の子ども新聞を全員分貯めておいて提供するなどの方法も今後取り入れたい。

●　新聞を購読していない家庭や，外国籍の児童（保護者の方）もたくさんいるなかで，さらに分かりやすく興味を引く実践として，どのような活用ができるかを考える必要がある。

本校の新聞活用～「新聞切り抜き作品」作りを通して～

平成 27 年 12 月 25 日（金）
南伊勢町立南島中学校
教諭　　田辺　宣昭

１　はじめに

本校は昨年４月に町内の２中学校（南島西中学校・南島中学校）が統合して、新しい南島中学校となり、開校した。両校の生徒とも、活字離れが進んでおり、新聞を購読していない家庭もいくつかある。

生徒が、活字に触れる機会を増やすために、新聞活用が効果的である。旧南島西中学校では９年間、新聞切り抜き作品作りを実施してきており、旧南島中学校では３年前に「いのち」に関する新聞記事を集める取り組みを実践した。

本校では、昨年に引き続き、実践指定校として２年間、「総合的な学習の時間」を活用し、この活動に取り組んできた。

２　実践内容

１学期末に、１年生の全生徒対象とした「わくわく新聞講座」を実施した。名古屋の中日新聞の記者を講師として招聘し、生徒にわかりやすく説明していただいた。

夏休みの課題は「自分のテーマに沿った記事をできるだけたくさん集めること」とした。（今年度はテーマは自由とした）

２学期に入り、各学年とも、集めた記事をさらに細かいテーマに分けたり、教室に配布される最新の新聞から記事を追加したりしながら、新聞切り抜き作品を完成させていった。

文化祭（１０／２５）では、完成した生徒の全作品を掲示し、全校生徒、全教職員、来校した保護者や地域の人々に見てもらい、好評を得ることができた。

３　まとめ

実践指定校２年目ということで、昨年よりもさらにレベルアップした作品をつくりたいという生徒たちの気持ちもあり、２学期からは週２時間、合計約１０時間ほどで完成させた。教職員も指導に慣れてきたこともあり、適切な指示やアドバイスをすることで、どの学年も完成度の高い作品を作ることができたと思う。

今年で実践指定校としては終了するが、この活動を通して、生徒たちは、新聞をいうメディアにじっくりと触れることで、社会の出来事に興味をもち、自分なりに考えをまとめるという活動ができた。このようなことが「生きる力」や「考える力」につながると確信している。

朝明高校での新聞活用授業実践報告

2015.12.25

三重県立朝明高等学校

教諭　中村優子

１．はじめに(目標とするところ)

昨年度、実践校に指定していただいた１年目、授業で新聞を活用しながら授業を進めた結果、思いのほか新聞を読めない生徒が多数いることに気づきました。新聞の記事の内容が、どこに記事が流れ、どこで終わっているのかさえわからず、「どう読めばいいのかわからないと」質問攻めでした。１年目は、新聞は難しいものではなく、身近なものであり、自分の役に立つものである、また役に立ててほしいという思いで実践しました。実践校２年目にあたり、新聞を手に取ることに慣れてきたため、新たな目標を立て、次の段階進める学習を取り入れていきたいと考えました。

目標設定

１．新聞の構成を学んで、新聞を読めるようになる。

２．実際の社会現状を知り現実を理解する。

３．多数者の意見から幅広い考え方を持つ。

４．作り手の意図を読み、主権者である自分自身の考えを深める。

５．自身の体験・経験にしていく。

昨年、上記１と２は行ってきたこととは言え、理解度段階では、まだ不十分である生徒もいるため、その段階に応じて進めることにしました。また、協働学習・アクティブラーニングが、この実践に有効であると判断し、学習形態はこの方法で行うことにしました。

２．実践内容

１・進路決定(進学活動・就職活動)に活かす

進路係の生徒を中心に、毎朝、朝刊を掲示してもらい、３年生の目に留まるように廊下掲示を行いました。新聞を購読していない家庭が、５４％いる中で、この掲示は非常に役に立ちました。特に就職試験前は、「この記事はなんて書いてあるの？」との質問が多く、反対に教員側からは、「記事の内容からあなたはどう考える？」との質問をし、その記事をきっかけに、単発ではなく、その前後の経緯なども調べて、そこに至る過程を幅広い目で見ることでができました。

２・新聞スクラップ

関心のある記事を１つ決め、それをジャンルごとにまとめ、記事の内容を要約し、感想や自分の考えを発表しました。文化祭で掲示を行い他の生徒にも評価してもらいました。校内では、初めての取り組みであったため、教室を埋め尽くす新聞掲示に圧倒されていた生徒もいました。

３．学校新聞を作成する

新聞を読者の立場で読むだけではなく、作成者の立場に立って、どのようにしたら読んでもらえるか、情報を発信できるか学習しました。１つの紙面で多くの情報を構成するにはまだまだレイアウトなど技術

面での力がなかったので、伝えたいことの分野を分けて、チームによる作成にしました。取材や、写真撮影、レイアウト、記事の内容など、一からの学習でしたが、３つの新聞が出来上がり、中学３年生に向けて、朝明高校体験入学時に配布することができました。まだまだ、記事を書くことよりは視覚に頼った新聞になっていますが、新聞を作成する前の段階の取材交渉や、インタビューの大変さ、得た情報から選別してどれを採用するかなどの体験ができたと思います。苦労した甲斐があり、新聞が完成して読んでもらえた時の喜びをチームで共有できたことが何よりの体験だったと思います。

４．日本・世界の課題を考えよう

自分自身を知って「良いところ、悪いところに気づこう」。良いところは伸ばして、悪いところは、その課題に気づき、できるだけ目立たなくしていこう。それを応用して、朝明高校、四日市市、三重県、日本、世界へと考える幅を広めていく授業を行いました。戦略として、良いところである強みは、より強く、悪いところである弱みは、その課題を考え、解決するためにどうすればいいかを考えました。朝明高校・四日市市・三重県までは、自分の所属する場所なので、簡単に課題を見つけることができましたが、日本・世界に至ると範囲が広すぎて考えが及ばないので、新聞記事を模造紙に、過去・現在・未来において現状、進行形、課題に分けてスクラップし、視覚化し、未来において今解決するために何をしなければならないかを話し合いました。世界においての課題とその解決法の話し合いは３学期の授業で行います。

５．その他

今年度、芸術科・情報科・社会科などから新聞を活用したいとの新聞提供願いをいただきました。幅広く活用していただいたと思います。

３．　成果と課題

実践した生徒が昨年は２年生、今年はその同じ生徒で３年生であったため、昨年度からの課題であった新聞の有益性を理解させる部分においては、目の前の進路決定において十分活用し、有用であることが理解できたと感じました。ただ、楽しく読むというもう１つの課題に対しては、「目の前の目標を達成するためには仕方がなく」であったり、「必要だから読む」に留まり、達成できなかったと感じます。また今年度の目標である、左記□内の３・４・５番は、生徒によっては達成できず、５番に関してはほぼ達成できていない状態です。今後の課題としては、新聞を読むことで、５番目の目標である自分の生活の選択に活かして行けることです。１８歳から選挙権も施行される予定で、人を選ぶにも、商品を買うにも、職業選択するにしても、またどういった人生を歩むのかも選択が必要です。そういった場面で、今まで読んできた新聞の記事から自分らしくどういった道を歩んでいったらいいか導ける力を高校で付けさせたいと考えています。

４．まとめ

新聞を読む習慣を定着させるには、まだまだ時間がかかると感じています。家庭での習慣がないうえに、新聞に対して苦手意識が大きいのがその理由だと思います。ただ卒業生は、上司から「ものを知らない」「新聞ぐらいは読んで来い」と言われるようで、学生の間に、新聞の読み方ぐらいは、教えておかなければならないと感じました。この２年間で、初歩の初歩ですが、授業で新聞を扱うことで、教えた在校生には新聞の構成は理解でき、読める力ぐらいはついたかなと思います。

２年間の実践指定校を終えて、新聞を提供してくださり、授業実践に協力して下さった全ての方に感謝いたします。

新聞を活用して多様性に気づく指導

～視野を広げ，社会とつながる～

セントヨゼフ女子学園高等学校・中学校

教諭　滝沢昌彦

１　はじめに（新聞活用の動機とねらい）

NIE 実践校となって２年目の今年度は，昨年度の取り組みを継続し新聞を授業に活用するよう教員に呼びかけた。また，高校２年生は昨年度からの取り組みを掘り下げて行い，複数の新聞を読み比べることで多様性に気づくことを目的とした。新聞は授業で学んだことと社会をつなぐ最も手軽で最適なツールである。新聞によって視野を広げ社会とつながることは，自己の将来を考えることになり，キャリア教育としても有効であると考える。

２　実践内容

（１）高校２年生新聞読み比べ発表（資料１）

昨年度新聞リレーを行った学年で，今年は読み比べ発表へと発展させた。以下 10 月から行っている取り組みを紹介する。

①生徒の希望する進路（国際・環境・理工・医療・法律・教育・芸術）に合わせ３～５名のグループを編成。

（資料１）

②練習として TPP に関して２紙を読み比べグループで気づいた点を発表。

③グループごとに記事を選び読み比べプレゼン準備。

④新聞読み比べ発表。

地域目線と外側からの視点の相違に気づくなど鋭い指摘もあった。

（２）中学１年国語の取り組み（資料２）

①１面貼り付け～記事選び

新聞に触れるため夏休みの期間中，一面の見出しを貼りその日の出来事を書く取り組みを行った。その後自分の好きな記事を貼り良い文や分からない文に線を引く活動をした。

（資料２）

②記事から動詞を拾い文法を学ぶ。

③ノーベル賞関連記事比較。

どの新聞の説明が分かりやすいか。

（３）高校３年英語記事の活用（資料３）

英語長文の読解力を付けるため HR 廊下に読売新聞 Daily News を置いた。

（資料３）

（４）中学３年公民の取り組み（資料４）

①男女雇用機会均等法制定 30 年に因み，制定当時の時代背

景を理解するために記事を活用するなど。
②北川保氏による新聞の読み方授業
（５）中学１年地理の取り組み
①ノートに記事を貼り要約，意見を書く。
②地図帳で記事にある場所を調べる。
③発表。　（資料４）
（６）高校３年現代文の取り組み
ノーベル賞の記事を活用しセンター試験形式の問題を作成。
（７）「一緒に読もう！新聞コンクール」への応募
夏休みの宿題として中学１年生と高校２年生の地理選択者が応募。
（８）各紙１面記事の掲示（資料５）
（９）進路指導室への配置（資料６）
今年度より進路指導室にラックを配置し生徒の自由な閲覧を可能にした。

（資料５）

（資料６）

３　まとめ
本校での NIE 実践校としての活動は，なるべく広い範囲で新聞を活用した授業を行うことを目標とした。教育とは学校全体で取り組んでこそ効果が現れると考えてのことである。職員朝礼などで度々呼びかけ活用を促したことで一定の参加は得られた。しかし学校全体の動きとなるには至らなかったことが反省点である。
その中で（１）高校２年生の新聞読み比べ発表は，２年間の学年全体の取り組みの成果である。昨年度の新聞リレーで他者との違いを意識させ，今年度は自己の進路を意識させつつ読み比べ，キャリア教育の一環とすることができた。
（２）～（７）は，各教科や学年で積極的に取り組んだものである。いずれも学年や教科の特性と必要性を考えつつ活用することができた。新聞に汎用性が高いことの証左である。通常の教科書中心の授業の中に新聞を取り入れることで，生徒の視野を広げることができる。新聞により教科書の内容が現実味を帯び，身近なものとして捉えられるようである。
そして複数の新聞を読み比べることの最大の効果は，視点の相違により内容が異なることを知る点にある。新聞とは事実を伝えるもので違いはないと考えていた生徒は多く，気づいた時は驚きつつ意欲が高まる手応えがあった。多様性を発見した瞬間である。
繰り返すが新聞は社会とつながる手軽で最適なツールである。新聞を活用することによって，抽象的な授業に具体性を与え学習意欲を高めることができると考える。